

„In meine Dachkammer,
eine Etage höher als der Himmel,
kommen sie alle.

„Menschen, die Goya und Utamaro lieben,
selte, ganz ausgefallne, verdrehte Exemplare und Hühner,
die Paestrina über Pietro Mascagni stellen,
alte Herren, die heimlich, wenn im März die Veilchen wieder blühn,
auf den Strassen kleinen Rotznasen Bonbons zustecken.

宮沢賢治とドイツ文学

へ心象スケッチへの源

植田敏郎

Ich liege auf dem alten Kräuterboden und „similliere“.

Der liebe Gott ist der Konditor Knorr.

Er hat eine weisse Mütze

und in seinem Fenster stehn lauter Silkörfaschen.

Wenn die Sonne scheint, kann man mitten durch sie durchsehn.

Dann sind die Kuchen dahinter manchmal gelb, manchmal rot und manchmal sogar blau.

Der Teufel ist der Stornsteinfleger Killkant

＊植田敏郎（うゑだ としろう）

一九〇八年広島市生まれ。一九三一年東京大学独逸文学科を卒業。同年八月から一九三六年三月までベルリン、ボン、ウィーン各大学で学ぶ。一九三七年四月から旧制静岡高等学校、東京外国語学校、学習院の各教授を、一九四九年から学習院、一橋、東北齒科各大学の教授を歴任し、一九八六年に退職する。

ドイツ文学、ドイツ児童文学の翻訳書が多数ある。また、ドイツ語学書や趣味としてのビールに関する随筆もある。

宮沢賢治とドイツ文学へ心象スケッチの源

一九八九年 四月二八日

第一刷発行

著者——植田 敏郎

発行者——佐久間裕三

発行所——大日本図書株式会社

東京都中央区銀座一丁目九番一〇号

電話・〇三―五六―一八六七八（編集）

〇三―五六―一八六七九（販売）

振替・東京 九―二一九番

印刷／株式会社厚德社

製本／岸田製本

©1989 Toshiro Ueda

Printed in Japan

ISBN4-477-11907-0

宮沢賢治とドイツ文学

〈心象スケッチ〉の源

序

私は一橋大学を定年で退職してから、郡山に一九七二年四月に創立されたばかりの東北歯科大学で、ドイツ語を教えていた。いつの間にか一三年経ち、四年まえそこも退いた。東北地方とはそれまで何のかかわりもなかった私が、郡山への行き帰りの列車の窓から、周囲の風景の移り変わりを眺めることと久しかった。桜前線の進み具合も、そんなことばはないが残雪線の後退状況も、一種の感慨をもつてたどった。東北版狐の嫁入りともいうべきにわか雪も、降り積った雪が突風でどっと一気に舞い上がるいわゆる地吹雪も初体験であった。すべり止めのついたゴム靴なしには過ごせない冬の東北の風物や生活は、今でも私の脳裏に焼きついている。何しろ私は、毎週ほんの数日とはいえ、学校の所在地郡山に泊まって、秀麗な安達太良山を眺め、安積疎水を通して猪苗代湖から流れ下る水を飲み、大げさにいえば東北、いや東北の入口の住民になっていたのだから。

こんなことがきっかけで、私は改めて宮沢賢治の作品を読んでこれまでとはややちがった見地から、それを味わうことができた。また、宮沢賢治に関する研究書もひとつとしてみた。そのうちに私は、それらの研究が、賢治の非常に広かった読書範囲に、十分に考慮を払っていないのではないかと感じた。また、宮沢賢治がドイツに風土的にも親近感を持って、ドイツ語を好み、ドイツ文学も研究したこと、

これもひつくるめて賢治の国際感覚ともいうべきものにあまり関心が払われていなくて、何もかもを国内的に処理してしまおうとされたのではあるまいか、とも考えた。それらに対して私の気のついたことを、私なりに書きとめたのが本書である。宮沢賢治研究の至りつくところが岩手県の花巻とすれば、これはまだせいぜい福島県の郡山どまり、といったところであろう。ここまで一応まとまったところで、大方のご叱正をいただければ幸いと思う次第である。

本書原稿の完成がゆくりなくも宮沢賢治永眠の一九三三年（昭和八年）から数えてちょうど五五年目に当たるというのも何かの因縁であろう。この本の執筆に際してご親切な示唆を賜った（順不同）学習院大学加藤泰義、早稲田大学高木実、都立大学丸山匠、熊本大学上村直己各教授と、内田老鶴圃代表取締役内田悟氏と、郁文堂社長大井敏夫氏と、南江堂ドイツ語課課長中村格士氏に、また出版の実務に献身的努力を払われた大日本図書の保坂重政、菅田慶三両氏に深く感謝する次第である。

一九八九年（平成元年）三月二三日

目次

序	2
1 「心象スケッチ」	7
2 『英独仏和哲学字彙』	29
3 「心象」	59

4	「エネルギー」	77
5	「比論」	107
6	「スケッチ」	141
7	『ファンタズ』	191
8	『絵のない絵本』	257
9	比較論	329

1

「心象スケッチ」

森佐一あて書簡

宮沢賢治の代表作の一つである『春と修羅』にも、また他のいくつかの作品にも、標題に「心象スケッチ」ということばがそえられている。賢治自身も、自作について語るときに、よくこのことばを用いている。だからこのことばは誰でも知っている。読者やまた研究者の中には、詳しくも考えずに「心象スケッチ」というのは「心象風景」と同じようなものだと考えている人がある。しかし一方、評論家や研究者の中のある人は、このことばに特に注目して、これについて研究したり、論文や評論の中で取り上げたりもしている。宮沢賢治の作品の注釈者となると、その作業の関係上、このことばを避けて通るわけにはいかない。それを分析したり、注解したりしている。研究者の中には、特にこのことばの起源について論じ、それによってその真意をつきとめようとする人もある。それらの注解や、評論や、論文はそれぞれなるほどと思わせるような内容を持っているが、これまでは、読者をすっかり納得させ、満足させるところまではいかなかったようである。

ところで、「心象スケッチ」の問題について、いちばん確かな手がかりを与えているように見えるもの、なんだ、賢治はこんなにはっきりと「心象スケッチ」について説明しているではないかと思わせる手紙がある。「心象スケッチ」が問題になるたびに、かならずといっていいほど引き合いに出されているので周知の、あの手紙である。それは賢治が花巻農学校から友人の森佐一にあてて書いた、一九二五年（大正一四年）二月九日付のものである。この手紙をまず示さないわけにはいかない。こ

の手紙こそ実際に確かな手がかりを与えているし、きわめて重要と思われるので、全文を引用するにとする。

お手紙拝誦いたしました。

詩の雑誌御発刊に就て、私などまで問題にして下すつたのは、寔に辱けなく存じますが、前に私の自費で出した「春と修羅」も、亦それからあと只今まで書き付けてあるものも、これらはみんな到底詩ではありません。私がこれから、何とかして完成したいと思つて居ります、或る心理学的な仕事の仕度に、正統な勉強の許されない間、境遇の許す限り、機会のある度毎に、いろいろな条件の下で書き取つて置く、ほんの粗硬な心象のスケッチでしかありません。私はあの無謀な「春と修羅」に於て、序文の考を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し、それを基骨としたさまざまの生活を發表して、誰かに見て貰ひたいと、愚かにも考へたのです。あの篇々がいゝも悪いもあつたものでないのです。私はあれを宗教家やいろいろの人たちに贈りました。その人たちはどこも見てくれませんでした。「春の修養」^①をありがたうといふ葉書も来てゐます。出版者はその体裁からバックに詩集と書きました。私はびくびくものでした。亦恥かしかったためにブロンズの粉で、その二字をごまかして消したのが沢山あります。辻潤氏 尾山氏 佐藤惣之助氏が批評して呉れましたが、私はまだ挨拶も礼状も書けないほど、恐れ入つてゐます。私はとても文芸だなんといふことはできません。そして決して私はこんなことを皮肉で云つてゐるのでないことは、お会ひ下されば、またよく調べて下されば判ります。そのスケッチの二三篇、どう

せ録でもないのですが、差し上げやうかとも思ひました。そしたらこんどは、どれを出さうかと云ふことが、大へんわたくしの頭を痛くしました。これならひとがどう思ふか、ほかの人たちとと比較してどうだらうかなどといふ厭な考がわたくしを苦しめます。わたくしは本統にそんなに弱いのですから、笑ってもようございます。どうかしばらく私などは構はないでこゝらにそつと置いて下さい。どうせ家を飛び出したからだですから、どこへ行つてもいい訳ですがいろいろの事情がもうしばらく、或は永久に、私をこゝへ縛りつけます。梅野さんにもお会ひして申し上げて置きます。又あなたのお手紙からあなたにお会ひしたいと思ひます。『校本全集』第十三巻、二二〇～二二二ページ、書簡集(28)

これまでの研究者もよく指摘しているように、賢治はこの手紙で、『春と修羅』も、そのあとで書いたものも、それらは「みんな到底詩」ではないこと、「或る心理学的な仕事」のために書き取っておくのだとはつきりいつているので、この文面だけ見ると、「心象スケッチ」ということばの意味はそんなに分かりにくいものではないような気がする。しかし一歩立ち入って「心象」とは何か、「スケッチ」とは何か、「心理学的仕事」とは何か、またそれに続いてすぐに現れている「歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画」するとはどういうことかとなると、賢治はそのヒントになるようなことは何一つ語っていないことが分かる。

「心象」の用語例

「心象」ということばが、いつごろから、またどのように用いられたかを知るとは、このことばの解明の手がかりになるかもしれない。宮沢賢治の作品で「心象」の用語例をさかのぼると、一九二一年（大正一〇年）末に書かれたと思われる「冬のスケッチ四」の「おもかげ」の、

心象しんしやうの燐光盤に

きみがおもかげ来ぬひまは

たまゆらをほのにやすらふ

そのことのかなしさ。

天河石てんがせき、心象しんしやうのそら

うるはしきときの

きみがかげのみ見え来くれば

せつなくてわれ泣けり。（同、第六卷、一二ページ）

がおそらく最初で、やはり「冬のスケッチ四」所収の、

かなしき心象

なみださへ

その青黝の辺に

消え行くらし。(同、四五ページ)

同じく、

(まことこの時心象のそらの計器は

十二気圧をしめしたり。)(同、四九ページ)

をあげることができる。日付のはっきりしていて、早期のものでは『春と修羅』の、

心象のはいろはがねから

あけびのつるはくもにからまり

のばらのやぶや腐植の湿地

いちめんのいちめんの詠曲模様(同、第二巻、二〇ページ、大11・4・8)

雨がぼしやぼしや降つてゐます。

心象の明滅をきれぎれに降る透明な雨です。『春と修羅』補遺「手簡」、同、二二九ページ、大・11・5・12)

それよりもこんなせわしい心象の明滅をつらね『春と修羅』「小岩井農場パート一」、同、六一ページ)

ちいさな自分を割ることのできない

この不可思議な大きな心象宇宙のなかで『小岩井農場パート九』同、八五ページ)

私はいま心象の気圏の底、

津軽海峡を渡って行く。『春と修羅』補遺「津軽海峡」同、二四一ページ、大・12・8・1)

それにだいいちいまわたくしの心象は

つかれのためにすっかり青ざめて

眩しい緑金にさへなつてゐるのだ(大・12・8・1、『春と修羅』「オホーツク挽歌」同、一七〇ページ)

七時雨ななしぐれの青い起伏は

また心象のなかにも起伏し、『春と修羅』「二本木野」、同、二二一ページ

これらは二十二箇月の

過去とかんずる方角から

紙と鉋質インクをつらね

(すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでのもちつゞけられた

かげとひかりのひとくさりづつ

そのとほりの心象スケッチです(『春と修羅』序、同、五〇六ページ)

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として

第四次延長のなかで主張されます(同序、八ページ、大13・1・20)

なぜ吠えるのだ 二疋とも

吠えてこつちへかけてくる

(夜明けのひのきは心象のそら)

頭を下げることは大の常套だ^{じやうたうだ}

尾をふることはこわくない『春と修羅』『犬』同、一二八ページ

あちこちこわれた鉄索のやぐらや

谷いっぱいの青いけむり

この県道のたそがれに

あゝ心象^{イメーヂ}の高清は

しづかな磁製の感じにかはる（同、第四卷「春と修羅 詩稿補遺」〔高原の空線もなだらかに暗く〕三〇〇

ページ）

など、これら「心象」は上述のように「冬のスケッチ 四」にはじまり、大正一一、一二年の作であると思われる『春と修羅』第一集にいちばんしばしば現れ、最後にあげた「詩稿補遺」には「心象」がイメーヂというルビをふった形で出ているが、これは宮沢賢治ではたった一度だけのことである。これだけが例外である。「心像」とあるべきで、私は賢治としては何かの思いがいでなかったかと思う。

以上「心象」ということばを、それらが作品に現れた順序でならべてみても、そこからは何一つ明らかにはならないようである。解明のための何かほかの手がかりはないものであろうか。